

SNSによる大学生のコミュニケーションについて

—自己開示度および自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響—

代表研究者

中田 美喜子

広島女学院大学 国際教養学部 教授

1 はじめに

近年、SNS やブログなどインターネットを通して、同じ趣味を持つ人や気の合う人と簡単に人間関係を築くことができるようになった。これらの人間関係は文字コミュニケーションから始まっている。中田 (2012) において、インターネットを通じたネット上だけの友人がいる学生は全体の3割と少ない結果が出ている。これは、実際の友人との関係に満足している学生が多いため、ネット上だけの友人を求めていないと考えられる。また、ネット上に友人がいる学生においても、その友人と実際に会ってみたいと回答した学生は3割であることから、ネット上の友人はインターネット上だけというように割り切った人間関係を築いている学生が多いようである。学生は対面でのコミュニケーションが取れる相手と深い人間関係を築いていると思われる。しかし、対面でのコミュニケーションにおいても、大学内と大学以外では友人の違いを感じる学生が全体の半数を占めている。学生は交友関係において「評価過敏・傷つき回避」「関わり苦手意識」をもち、人との関りを苦手としている学生が多いことが認められた。また対面コミュニケーションを行う友人に対して、人間関係が円滑にいくことを優先するために、自分の気持ちや考えをきちんと伝えることを避ける「自己隠蔽」の傾向が強いという結果が示された。この結果から友達の評価に過敏となり、友人関係で自分が傷つくことを恐れる学生が多く存在することが認められた。

現代の若者と交流するにおいて、彼らの友人関係の特徴をとらえて対面していくことで、指導や対応がスムーズに行われる可能性がある。本調査によって、「今の若者は」といったネガティブな対応をすることなく、彼らとともに社会を創っていくことが可能となると思われる。

2011年、女子大生による調査を報告した(中田・記谷、2011)。その結果を2007年(尾上、2007)の調査と比較したところ。パソコンの所有率が16.4%から48.6%へ増加している。このことから一家に1台でパソコンを所有していた時代から1人に1台の時代へ変化していることが示された。今後もパソコンのコンパクト化が進み持ち運びやすくなり所有率は増加すると考えられる。情報伝達機器の利用状況や利用頻度について、2007年ではSNSの利用頻度の回答として「毎日利用する」を選択した者が最も少なかったのに対し、中田ら(2011)の結果では「毎日利用する」を選択する者が最も多くなった。この結果は約5年の間にSNSが普及したことを示している。

自己開示度の高低群別分析では、「情報伝達機器を通じて知り合いと会ったことがあるか」という項目においては有意差が認められた。自己開示が高い人ほど積極的にネット上の友人に会いに行く傾向が示された。しかし、「情報伝達機器だけの友人と身近な友人で異なりを感じるか」という項目で有意差は認められなかったため、情報伝達機器での友人と身近な友人とはまだ同じものとして考えられるところまではいたってないのではないかと考えられた。さらに2012年では男女大学生による調査を実施し検討を行った。その結果、「評価過敏・傷つき回避」「関わり苦手意識」をもち、人との関りを苦手としている学生が多いことが認められた。自分の気持ちや考えをきちんと伝えることを避ける「自己隠蔽」の傾向が強いという結果が示された。これらはSNSの利用における結果であるが、近年さらに親密なコミュニケーションを創れるSNSの利用が増大している。これによって、また新しい人間関係ができていく可能性があると思われる。本研究では、スマートフォンの普及により利用が増大してきたアプリケーションによる新しい人間関係を調査分析する必要があると思われる。2010年以前の報告では、大学によっては学生がSNSをほとんど利用していない大学もあった。2012年度の調査では、利用していない学生が大変少なくなっており、今後も大学による差は認められなくなってくると思われる。さらに地方、男女による差も認められにくくなる可能性がある。これらの結果から友達の評価に過敏となり、友人関係で自分が傷つくことを恐れる学生が多く存在することが認められた。大学のゼミなどの学生個別指導において、学生の傾向を認識した指導を行う必要があることが示唆されている。そのためにも、新しいコミュニケーションツールを追加した質問項目を作成し、人間関係の変化について

て比較分析していく必要があると思われる。

一方、コンピュータや携帯電話の普及に伴い、インターネットを利用した新しいコミュニケーションの方法が出現し、それを利用したコミュニケーションの機会が増加している。これらの新しいコミュニケーション方法は、コンピュータ間コミュニケーション（CMC）と言われ、大学生における人間関係にも様々な影響をあたえている（尾上、2007、橋元、2008）。

SNS の普及により、非常に大きな変化が起こっている。例えば、地震などのニュースなどで取り上げられた話題がすぐに SNS に入ってくる。1995 年 1 月 17 日に発生した阪神大震災に伴う混乱は、従来の通信連絡網が遮断・寸断された状況下にあつて人と人、人と情報を結ぶインターネットの必要性の大きさを感じた出来事であった。また 2011 年 3 月 11 日の東北大震災においても、ほとんどの電話が不通となり、携帯電話も中継局などの損害によりほぼ全滅となり、携帯メールも送付してから届くまでに数時間から数十時間を要したと報告されている。このような中、ほぼ通常と同じように使えた連絡手段は、ツイッター 「安否確認だけでなく、政府や各自治体、報道機関が発表した情報なども書き込まれたため情報入手手段として大変有効であった。また、特定の人との直接やり取りができるダイレクトメッセージは、電話やメールのやり取りができないときに有効であった。」 スカイプ（インターネット電話）「都内では地震発生数時間後に通話ができしたが、緊急電話番号への発信は難しかった。」 災害用伝言板「派祖今夜携帯電話から書き込まれた伝言を閲覧できたが、回線が不安定な時間帯ではつながりづらかった。」 ワンセグ放送「携帯電話回線やインターネット回線に接続されていなくても視聴でき、地震発生直後から安定していた。」これらが有効であったと報告されている。また Google メールサービス(Gmail)も比較的つながりやすかったと報告されている(目黒 他、2011)。しかし、CMC の利用はメリットだけではない。リアルタイムで会話できることにより即時の返事を求められているような時間的切迫を感じ、掲示板やホームページでの誹謗中傷によって心を病み、パソコンや携帯電話など機器だけでのやり取りに孤独感を感じるなどさまざまな問題点がある。

本研究では、SNS に代表される新しいコミュニケーションについて学生の自己隠蔽度と自己開示度との関連を見出し、どのように対応しようとしているのかを調査検討した。

2 方法

2-1 調査対象者および実施日

広島県内の大学生 581 名（男性 171 名、女性 410 名、平均年齢 18.9 才）を対象に、質問紙による調査を、2014 年 7 月から 10 月に実施した。

2-2 調査の方法

アンケート内容は、性別、年齢、パソコンの使用頻度、携帯電話の使用頻度、友人関係について、パソコンを用いたコミュニケーションツールの利用頻度、SNS とブログを別々の項目を設けた。また、SNS ブログの利用については自己開示につながる項目として坂本（2010）と同様の項目を設定した。携帯電話を用いたコミュニケーションツールの利用事項については、SNS ブログ別に回答を求めた。自己隠蔽については、日本語版自己隠蔽尺度(河野、1998、2001)をもとに作成した。

2011 から 2012 年に調査を行ったものと同様のアンケートを再度検討し、新しくスマートフォンで利用が増加しているコミュニケーションツールを追加した質問項目を作成した。

現在までの主な調査内容は「情報伝達機器の使用について」6 項目、「日ごろの友人関係について」6 項目、「ネット上の友人について」11 項目、「交友関係について（自己開示、自己隠蔽）」16 項目、「携帯電話への依存について」14 項目の 5 つのカテゴリーから構成される。「情報伝達機器の使用について」は、携帯電話所有の有無。購入年齢。携帯メールのやり取りの平均数、携帯電話の利用事項などについて質問する項目を採用している。「日ごろの友人関係について」は、大学で一緒に生活している友人の人数、大学内で親友と呼べる友人の人数、大学以外での友人の人数、大学以外で親友と呼べる友人の人数、大学の友人と大学以外の友達の異なり、悩み事を 1 番に打ち明けるのは大学の友人と大学以外の友人のどちらかなどについて質問する項目を採用する。「ネット上だけの友人について」は、ネット上の友人の有無、友人との出会い、ネット上だけの友人という人間関係の満足度、孤独感、ネット上の友人の必要性、ネット上で知り合った友人に会っ

たことがあるか、ネット上の友人と身近な友人との異なりなどについて質問する項目を用いる。

「交友関係（自己開示・自己隠蔽）について」は、尾崎、九東（2009）の研究を参考に項目を検討し、「携帯電話への依存について」は、土本、緒賀（2006）の研究を参考に質問項目を作成する。全質問項目は 62 項目以上となった。

調査方法として、先行研究の調査では、質問紙による調査を主体として実施してきた。大学生が回答しやすく、回収しやすいため紙による調査が重視されてきた。アンケート作成にあたって、個人情報の保護や人権について日本心理学会の規定にそった同意書を作成し、教示で研究目的を説明し同意できた人のみアンケート回答を実施した。質問紙で 22 ページにわたるアンケートであるため、実施した学生にはすべて図書カードを回答の謝礼として手渡している。教示の際にも謝礼を渡すことを説明して実施している。これが正確な回答の動機づけになる可能性があると思われる。

今回の質問項目では、当初回答について複数回答が必要だとする質問項目があった。その場の判断で被験者には順位を書き込むことを追加で依頼した。その後のアンケートでは、項目を追加し複数回答と順位を記載することとした。

教示では、研究の目的と意義および研究の方法とプライバシーの保護および不利益防止への配慮について説明し、承諾した人のみアンケートに参加を依頼した。同意書を提出した後、アンケートに記入し、終わった人から回収した。調査データは、すべて対象者番号をつけて扱い、個人が特定できないようにした上で統計的に処理した。分析は SPSS 統計ソフトを使用した。

3 結果

自己隠蔽の項目ごとの平均値を表 1 に示した。それぞれの質問項目に対して、当てはまらないから、当てはまるまで 5 段階で回答を行った結果である。全体平均では、3 以上の得点項目として「自分について人に話してないことがたくさんある」「隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある」「自分の秘密を話しても、良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う」が認められた。のほかの項目は 2.5 以上 2.9 以下の得点であった。特に偏差値の小さな項目については、ほとんどの学生がそのように感じている項目であるといえるため、気を付ける必要があると考える。

自己隠蔽の得点を集計し、平均値から自己隠蔽度の高い群と低い群に被験者を分けて分析を行った。パソコンの利用、「1 日のパソコンの使用時間」「1 日のパソコンメールの平均数」「1 日の異なる人とのパソコンメールをやり取り人数」「1 日の携帯電話の使用時間」「1 日の携帯メールの平均数」「1 日の異なる人との携帯メールをやり取り人数」の項目において分析した結果、1 日のパソコン利用の時間のみ有意差が認められた ($\chi=15.08$, $df=5$, $p<0.05$)。

表 1 自己隠蔽項目の平均値一覧

	平均値	標準偏差
誰にも打ち明けられない重要な秘密をもっている	2.9	4.2
自分の秘密はあまりにイヤなもので、他人には話せない	2.9	4.2
もし友達に自分の秘密を話したら、友達は私のことを嫌いになると思う	2.6	4.2
自分について人に話してないことがたくさんある	3.2	4.2
親友にも話せないことがある	2.9	4.2
自分を苦しめる秘密を持っている	2.6	4.2
何か悪いことが起こったときも人に話さないほうだ	2.9	4.2
隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある	3.2	1.3

自分の秘密を話しても、良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う	3.1	1.2
自分の秘密について聞かれたときは嘘をつこうと思う	2.8	1.2
自分自身について、人に打ち明けられないような否定的な考えをもっている	2.7	1.2
自分ことを人に話すことに抵抗を感じる	2.6	1.1
人に話しても自分の苦しみは分かってもらえないと思う	2.7	1.2

結果を図 1 に示した。特にコンピュータの利用について今回の結果は利用時間が少ない結果になっている。

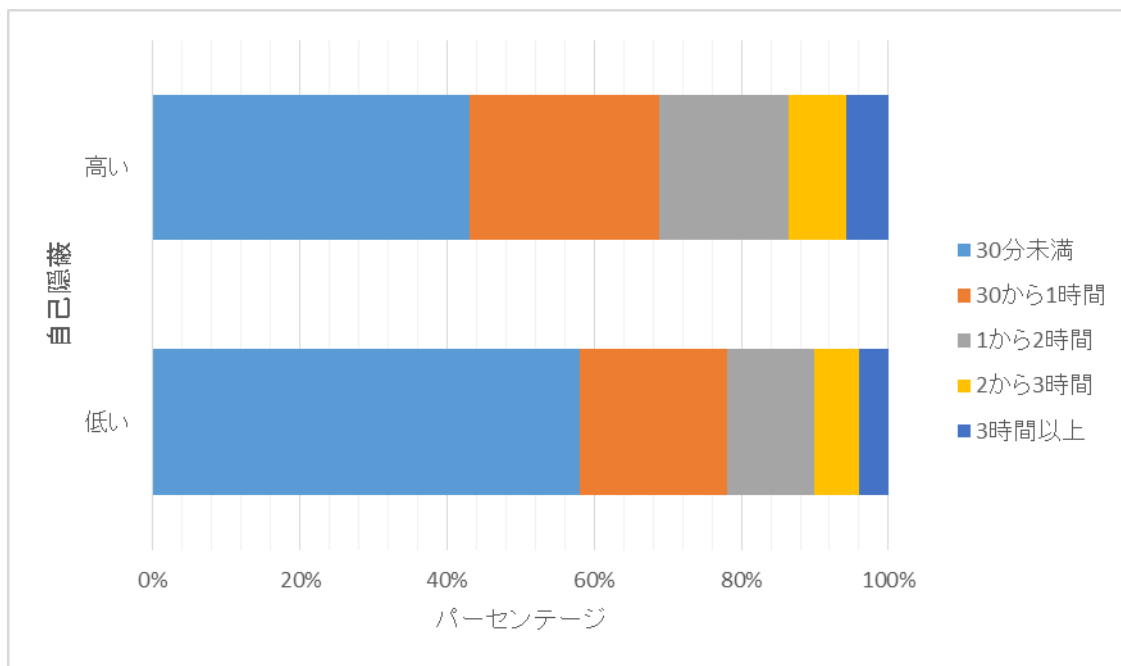


図 1 自己隠蔽の高低群における PC 利用時間の比較

これは 10 月の最初にアンケートを実施したものと 7 月のもので 1 年生が多く、コンピュータによる課題提出などが多数ある 7 月と講義の開始で課題の少ない 10 月でも違いがでる可能性があったため、アンケート調査の日程にも気を付ける必要があると思われた。

学生の日常生活および交友関係について、自己隠蔽度の高低群で比較した。「自宅か下宿か」「学内・学外を問わずクラブ、サークルや団体に入っていますか」「親しい友人の数」「学友たちと楽しくやっている」「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」の項目についての回答を分析した。その結果、「親しい友人の数」において ($\chi=16.66$, $df=4$, $p<0.01$) と「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」 ($\chi=42.21$, $df=4$, $p<0.01$) において有意差が認められた。自己隠蔽高低群における友人の数の一覧を図 2 に示した。特に自己隠蔽の低い群において、10 人以上の友人があるものが有意に多く、1 から 9 人までの人数は優位に少ないことが示されている。自己隠蔽度が高い場合、対面における対人関係においても人数が制限される関係になっている可能性があることが認められる。

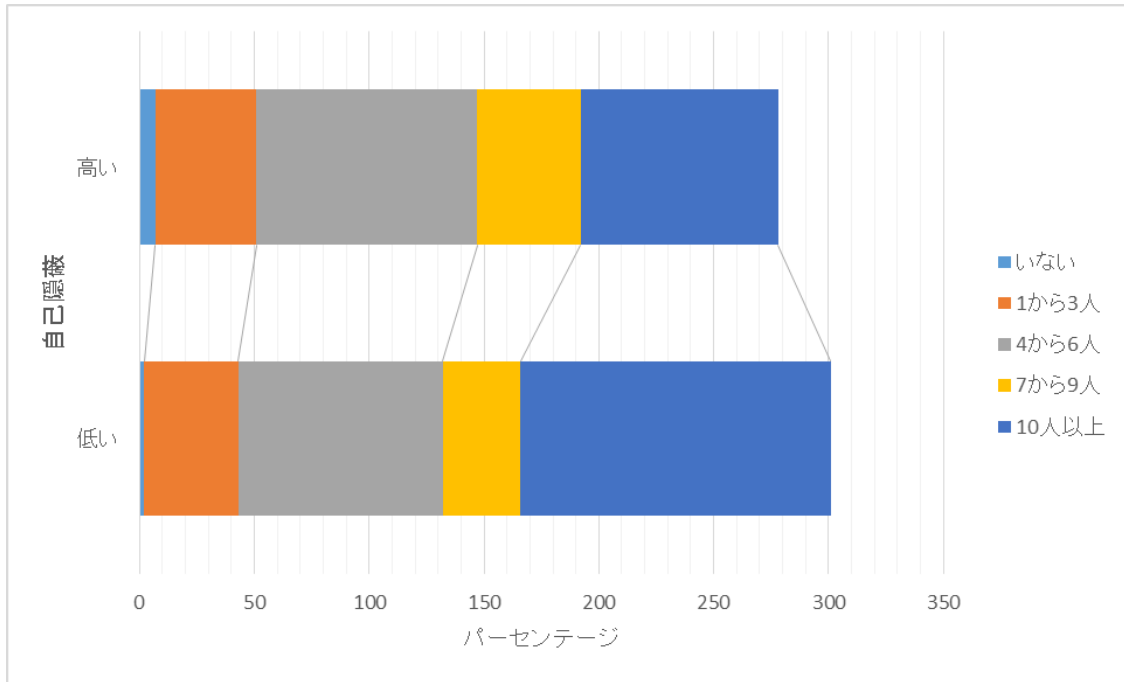


図 2 自己隠蔽高低群における友人の数

また、「学内はうわべだけの付き合いが多い」についても図 3 に示した。その結果、自己隠蔽の低い群においては、「当てはまらない」17.6%、「あまり当てはまらない」34.9%、「やや当てはまる」17.3%「当間春 2.7%」であった。高い群においては、「当てはまらない」5.7%、「あまり当てはまらない」23.7%、「やや当てはまる」30.8%、「当てはまる」6.8%であった。この結果から、自己隠蔽の高い群では対面のコミュニケーションは表面的に対応している可能性が高いと思われる。

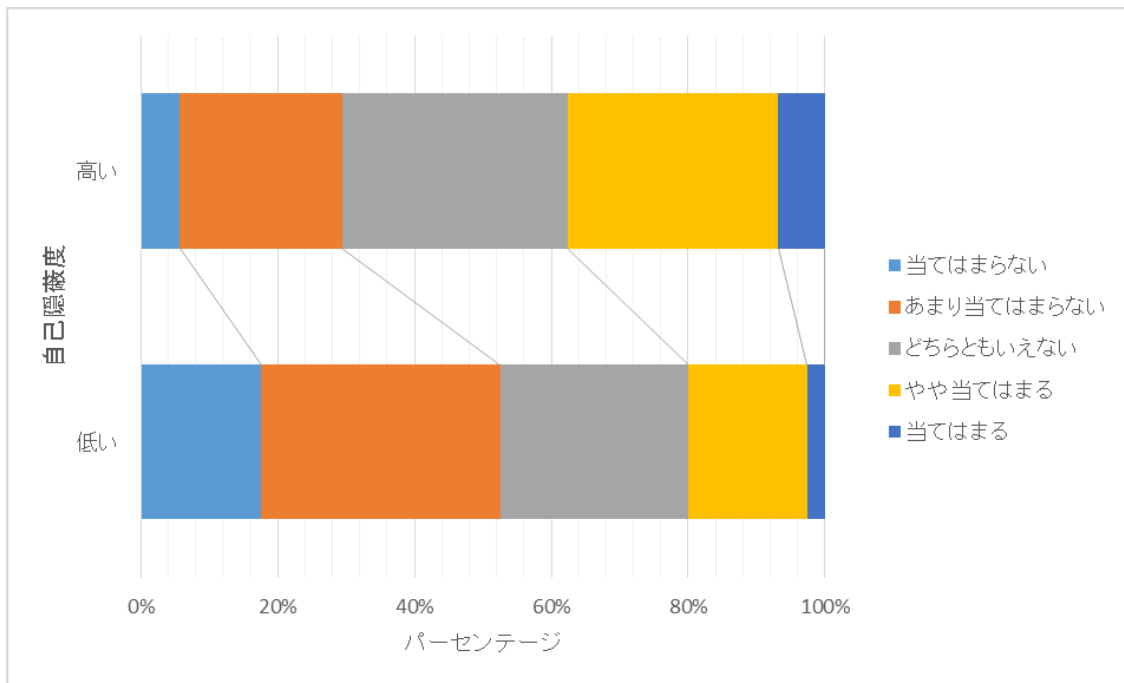


図 3 自己隠蔽の高低群における学内友人における質問回答

(質問：「学内はうわべだけの付き合いが多い」)

SNS に書き込む内容についての質問項目では「好きなもの (音楽・映画・服装など)」「休日の過ごし方」「最近の楽しかったできごと」「最近夢中になっていること」「趣味にしていること」「楽しみにしているイベント」「これから趣味としてやってみたいこと」については両群において、50%以上が「少し話す」「よく話す」

という結果となった。楽しいこと、趣味について SNS に多く書き込む傾向があることが示唆された。

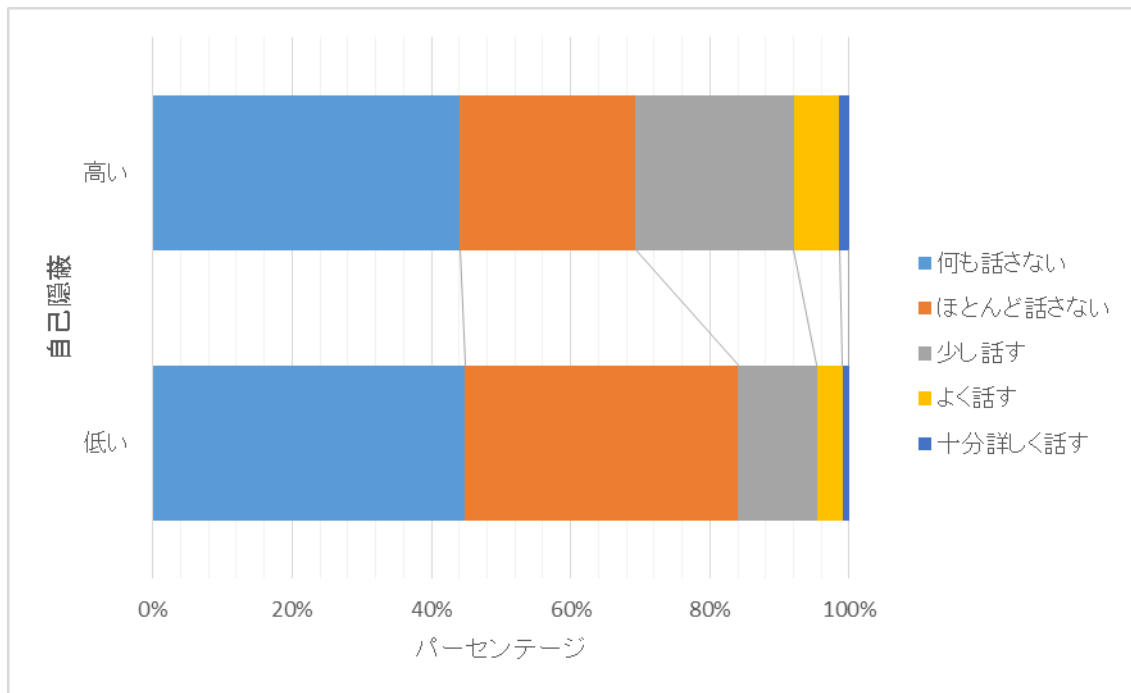


図 4 自己隠蔽の高低群における SNS で書き込む内容

(質問:「ささいな欠点かもしれないがときどき落ち込んでしまうこと」を SNS に書き込むか)

群間においては「ささいな欠点かもしれないがときどき落ち込んでしまうこと」について有意な差が認められた ($\chi^2=22.46, df=5, p<0.01$)。どちらの群においても比較的書かない回答が多く、「何も話さない」「ほとんど話さない」が自己隠蔽低い群で 83.8%と高い回答を示し、自己隠蔽の高い群で 69.1%であった。また自己隠蔽の高い群では、「少し話す」が 16.7%であり、自己隠蔽が低い群では 22.7%であった。この回答の差が有意であった。これらの結果から、SNS に書き込む内容は、楽しいことや趣味について記載していくことが多いことが認められ、自己隠蔽の低い群では個人的に苦しかったことなども「少し話す」という回答があることから書き込みを行っていく可能性もあることを示している。SNS への書き込みについては、情報倫理などの科目でいろいろな犯罪に巻き込まれる可能性や、使い方について知識をもっているため、書き込みの内容については、気を付けて書いている可能性が高いと思われる。

4 まとめ

質問紙によって学生の新しいコミュニケーションの方法 SNS やブログの利用について、自己隠蔽の高低によりどのような対応を行うかについて検討をした。その結果、自己隠蔽が高い群においては、どの項目でも書き込みが少なく、身近な友人の人数も少ないことが認められた。さらに SNS やブログへの書き込みについても、注意深くなかなか書き込みを行わない方向にあることが示唆された。自己隠蔽の低い群においては、楽しいことや趣味についての書き込みは高い群と同様に行い、さらに落ち込んでいることについても、「少し書き込む」という回答が 22%程度あることから、自己隠蔽度が低いほど、SNS やブログなどへの書き込みを行う傾向があることが示された。

今後質問紙をさらに分析していくことで、新しいコミュニケーションをどのように考えて対応しているかについての解釈が可能となると思われる。

【参考文献】

1. 中田 美喜子, コンピュータを利用したコミュニケーションと人間関係(2) —女子大学生の意識調査から—, 広島女学院大学論集 62, 1-10, 2012-12-19
2. 中田 美喜子・記谷 康之, コンピュータを利用したコミュニケーションと人間関係 —女子大学生の意識調査から—, 広島女学院大学論集 61, 131-138, 2011-12-21
3. 尾上 恵子, 女子学生の間人間関係構築における諸要因について, 一宮女子短期大学紀要 46, 15-22, 2007-12
4. 橋元 良明, 中村 功, 関谷 直也, 小笠原 盛浩, インターネット利用に伴う被害と不安, 東京大学大学院情報学環情報学研究. 調査研究編 26, 27-80, 2010-03-30
5. 目黒 公郎, 大原 美保, 沼田 宗純 [他], 近藤 伸也, 3. 11net東京(東日本大震災復興支援研究者ネットワーク)の活動報告 その1, 生産研究 63(6), 735-737, 2011
6. 坂本 季実子, インターネット上における大学生の自己開示に関する要因, Kwansai Gakuin policy studies review, (13), 1-29, 2010-03-20
7. 河野 和明, 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)および抑制的会話態度尺度の尺度特性: 記述統計と因子分析, 東海学園大学研究紀要. 人文学・健康科学研究編 13, 45-52, 2008-03
8. 山本 太郎, 千葉 直子, 間形 文彦 [他], 高橋 克巳, 関谷 直也, 中村 功, 小笠原 盛浩, 橋元 良明, ネット上の不安に関する質問紙調査における CGM 利用の有無による差異について(セキュリティと倫理, 一般), 電子情報通信学会技術研究報告. SITE, 技術と社会・倫理 110(231), 25-30, 2010-10-08
9. 橋元 良明, 調査から見た被災地におけるメディアの役割(<特集>震災後のメディア研究, ジャーナリズム研究), マス・コミュニケーション研究 (82), 19-34, 2013-01-31
10. 山本 太郎, 橋元 良明, 中村 功 [他], 関谷 直也, 小笠原 盛浩, 千葉 直子, 関 良明, 高橋 克巳, Twitter 利用を中心とする震災時の情報行動と通信不安: 関東 Twitter 利用者ウェブ調査, 東京大学大学院情報学環情報学研究. 調査研究編 28, 115-160, 2012-03-28
11. 橋元 良明, 新たな時代の情報の受容と発信(<特集>情報の収集と発信), 情報の科学と技術 63(12), 480-485, 2013-12-01
12. 中田美喜子, SNS による大学生のコミュニケーションについて—自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響— 広島女学院大学国際教養学部紀要, 第 2 巻, 27-33, 2015

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
SNS による大学生のコミュニケーションについて —自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響—	広島女学院大学国際教養学部紀要第2巻	2015.2